

歐陽脩の詩の評價基準をめぐって

増 子 和 男

前言

歐陽脩(1007—1072)が、北宋の文化的指導者として残した業績は多岐多方面に渉り、その影響は北宋一代にとどまらず、永く後世にまで及んでいる。

文學においても、彼は多くの分野に業績を残しているが、『詩話』⁽¹⁾をはじめとする文學評論の分野での發言には、注目すべき點が少なくない。

本稿では、歐陽脩が詩文——とりわけ詩を——評價するに際して用いた基準の主なものを取上げ、それを通じてその文學論の特質の一端に觸れ、併せて後世に投げかけた波紋について見ることにしたい。

(一)

『詩話』をはじめとする文學評論の分野において、歐陽脩が作品を評價する基準としてしばしば用いたのは、

①理(理通) ②情(人情) ③窮(窮而後工)

である。このうち①と②とは、歐陽脩の各分野での發言に頻出する語であり、それに對する考究の蓄積も少なくない。⁽²⁾ところが、歐陽脩が文學論においてもこれらの語を頻用しているにも關らず、そこでどのように用いられ、どのような意味が與えられているかを考究したものは意外と言って良いほど少ない。假に觸れても「抽象的評語が多い」⁽³⁾程度で止まっているのが概ねの現状と言える。

先に筆者は、①の問題について觸れた。基本的考え方は現在も當時と變る所はないが、この數年程の間に主として哲學

方面の人々から貴重な發言があり、多くの裨益を受けることが出来た。⁽⁵⁾そこでまず①の問題から順を追って整理し、その問題点を検討することとしたい。

* * *

歐陽脩は、『筆説』の中で「凡そ、物に常理有り（凡、物有常理）」と述べ、「理」は萬物に存すると主張した。その主張は文學論に於ても貫かれ、『詩話』の中で次のように述べる。

○詩人、貪求好句、而理有不通、亦病也。

文學作品の重要な要素として「理」を説くこと自體は、歐陽脩に始まるわけではない。中國文學史上初の文學論の專著として知られる魏・曹丕「典論・論文」に、

○夫文同而未異。蓋奏議宜雅、書論宜理、銘誄尙實、詩賦欲麗（『文選』卷五二）

と發言されて以來、多くの人々によって繰返し主張された事柄である。

しかし、歐陽脩の主張の特異さは、それ迄の大部分の人々

が「理」の必要性を説きながらも、それを文章のみに限定しようとする中であつて、詩にすら「理」を不可缺とした點にある。たとえ好句であろうとも、「理」が通じない詩は、優れたものとは言えない、とする彼の主張は、傳統的な文學論にのっとりながらも、「凡そ、物に常理あり」という考えに従い、「理」の必要性を詩の分野に迄擴大したものであつた。

ところで、その「理」の内容は、今日我々がこのことばから抱く、形而上的・哲學的イメージ——朱子學に代表されるイメージ——とは趣きを異にする。それは、「理」に對する傳統的イメージである、物事のきまり、さだめ、條理といった、ごく普通の秩序概念——物事は本來かくあらねばならぬという秩序感——に従うものと見て良からう。

歐陽脩の稱する「理」が秩序感を示す語であるならば、彼が詩を評價るに際して用いた「理通」の意味も明らかになる。すなわち、「理通」とは詩の内容に秩序感のあるものであり、「理不通」とは詩の内容が秩序感を失つたもの、ということになる。

それでは具體的に、歐陽脩の言う秩序感のある詩（或は無⁽⁶⁾い詩）とはどのようなものであらうか。この問題に答える好

例は、「理不通」の例に見出される。

その『詩話』において、詩人が好句を求めるあまり、理の通ぜぬもののあるのは、「語病也」とした彼は、その例として、唐・張繼の「楓橋夜泊」を取上げ、次のように述べる。

○唐人有云、姑蘇城外寒山寺、半夜鐘聲到客船。說者亦云、句則佳矣。其如三更不是打鐘時。

この作品が「理の通ぜざる有り（理有不通）」と評される理由は、三更（今の午前零時の前後二時間ほど）は鐘を撞く時間ではないのに、それが聞えた、という一點にある。つまり、この作品が秩序感を失っているのは「實事」と相違しているからである、と見たのである。この逆を考えれば「理通」の内容も明らかとなる。歐陽脩が言う「理通」とは、詩の内容が「實事」と一致することなのである。『詩話』の中には、彼がいかに「實事」を重視していたかを示す例が幾つも見出され、中には、

○其語淺近、皆兩京之實事也。

歐陽脩の詩の評価基準をめぐって（増子）

というように、「實事」さえうたわれていれば、用語は度外視するかのとき發言すから見出される。

そして「理」の通、不通を問わず、右の「楓橋夜泊」に対する批評に見るのと同じく、それを考證を通じて證明しようと試みる。何となれば「秩序感」という一見確固たるものに見えるものは、實は他者の同意なしには成立しない、という性質を有しているからである。ある作品の「理不通」を批判し、或は「理通」を賞揚しようとも、そのみでは不十分である。「秩序感」という甚だ感覺的なものに依據している以上、それを失っているか否かは、人々に共感されねばならぬいからである。そこで彼は、共感を得るべく、考證によってそれを證明しようと試みたのであろう。

しかし、歐陽脩が一つの作品を「秩序感」に基づいて評價しても、それが考證を據り所として説かれて以上、「秩序感」を共有し得ぬ人々から、更なる考證によって評價が覆される危険を常に孕んでいる。

「楓橋夜泊」批判の論據となった、夜半（三更）は鐘を撞くべき時ではない、という彼の考證は、その後囂々たる論議を巻き起こした。結局彼の考證は、張繼と同じ唐代の皇甫冉の「秋夜嚴維宅」や、同じく陳羽の「梓州與溫商夜別」など

の記述によって、誤りであることが證明された。⁽⁷⁾これにより、批判の唯一の論據は失われ、彼の「秩序感」は、人々に共有されないこととなった。

(二)

○詩文雖簡易、然能曲盡人事、而古今人情一也。求詩義者、以人情求之、則不遠(『詩本義』卷六「出車」)

後漢・鄭玄の所謂古注が、長期に涉って絶對的權威であつた詩經解釋學史において、歐陽脩は初めて「人情」をもつて詩經を解釋すべきことを主張した。彼は「古今 人情は一也」という考えを據り所に、多くの分野で「情(人情)」についての發言を繰返した。

それは文學論でも主張されるが、「理」の場合と同じく、その主張は彼を俟って初めて述べられたのではない。「情」と詩との關連性についての指摘は、西晉・陸機「文賦」に、「詩は情に縁^まって綺靡たり(詩緣情而綺靡)」「(『文選』卷一七二)と述べられて以來、幾多の抵抗を受けながらも、やがて廣い支持を受けるに至つたものである。

歐陽脩が多大な影響を受け、尊崇著しいもののがあつた韓愈

も、文章に對しては、「文は理を爲す所以^{ゆゑ}のみ(文、所以爲理耳)」と道破しつつも、詩については、

○多情懷酒伴、餘事作詩人(和席八席八、十二韻)⁽¹⁰⁾

とすら述べ、詩作に情が不可缺であると主張した。

歐陽脩の主張も、韓愈のように「多情」を求めるときには至らぬものの、詩に「情」を求めること、韓愈に同じである。

詩を評價する際にも、當然こうした考えに従い、次のように述べる。

○古畫畫意不畫形、梅詩詠物無隱情(盤車圖)〔『居士集』卷六〕

○至於柳塘春水慢、花塢夕陽遲、則春物融怡、人情和暢、又有言不能盡之意(郊島詩窮)〔『試筆』〕

韓愈が、「理」は文章に、「情」は詩にとってそれぞれ不可缺なものとしていたのは、從來の文學論に即しての發言である。一方、これに對して歐陽脩は(一)で見たように、「理」

をも詩に必要であると主張していた。

「理」と「情」——我々の今日的感觉からすれば、相反するこの二つのものを同時に詩に求めることは一見不可能であるかのごとく映る。しかし、歐陽脩の場合、兩者の共存は矛盾するものとしてとらえてはいないようである。

彼の稱する「理」は「秩序感」という、いわば感覺的なものであった。そしてその秩序感は、人々による共通理解を前提とするものであった。共通理解（共感）を要するという點から言えば、「情」もまたそうした性質を有するものである。従って兩者の間には、矛盾よりもむしろ表裏一體的な趣きすらある。歐陽脩にとつては、「古今人情は一也」という發想こそが、恐らく「理」なのであろう。⁽¹⁾

けれども、彼の稱する「情」の前提となつた、「古今人情は一也」という發想が、どの程度の確度を持ったものであるか、がここで問題となる。

成程、今日の我々が千年を遙かに越える以前の詩に感動を覺えるのは、「古今人情は一也」であるからにはかななるまい。しかし、今日傳存する古典の多くは、幾多の淘汰を受けて今日迄残るを得たものである。或一時期爆發的人氣を得ながらも、やがては消えていった無数の作品群をその背後に持

歐陽脩の詩の評價基準をめぐって（増子）

つことは多言を要しまい。一時的共感を得た爲に著しい流行を見、その共感が持續されなかつたが爲に滅び去つた作品群を想起するとき、「古今人情は一也」とする歐陽脩の主張は、必ずしも普遍性のあるものとは言い得ない。

詩評價の基準である「情」もまた、「理」の場合と同じく、安定した評價基準とはなり得ぬものと見る事が出來よう。

(三)

歐陽脩が、詩評價の基準とした「窮（窮而後工）」は、「理」「情」がことばとして抽象的であるのとは、一見趣きを異にしたもののように見える。すなわち、作者の環境が作品形成に深く關り、その環境が嚴しいものであればあるほど、その生み出す作品は優れたものになる、とするのが主張の骨子である。

○至於失志之人、窮居隱約、苦心危篤、而極於精思、與其所感激發憤、惟無所施於世者、皆一寓於文辭。故曰、窮者之言、易工也（「薛簡肅公文集序」〔「居士集」卷四四〕）

この説を讀んで、まず想起されるのは、前漢・司馬遷の

「發憤著書」説であろうか。『史記』の末尾(卷一三〇)に記す「太史公自序」には、周・文王以下の「聖賢」たちが書を著した理由を「發憤の作を爲す所也(發憤所爲作也)」と主張していた。

韓愈もまた、有名な「送孟東野序」において同様の見解を示す。

○大凡物不得其平則鳴、(中略)人之於言也、亦然。有不得已而後言。其歌也、有思。其哭也、有懷。凡出乎口而爲聲、其有弗平者乎(『昌黎先生集』卷一九)

歐陽脩の示した見解は、これらの見解、とりわけ韓愈の言説をふまえた上での發言であろう。それは、韓愈が「其の平を得ざれば則ち鳴る」とした孟郊を、同じく韓愈の門下であった賈島と共に、

○唐之詩人、類多窮士。孟郊賈島之徒、尤能刻篆、窮苦之

言以自喜(『郊島詩窮』(『試筆』))

○孟郊賈島、皆以詩窮至死、而平生尤自喜爲窮苦之句

(『詩話』)

と高く評價していることから窺えよう。

だが、この評價基準もまた、「理」「情」と極めて良く似た性質を持つ。「窮而後工」という主張が假に支持されたとしても、歐陽脩がその評價基準に合致すると考えた作品や作者が、必ずしも人々に同意されない可能性が存するからである。つまり、「窮」という環境にある作者が「後工」であるか否かについて、批評者がいかに聲高に主張しようとも、それに同意する人なしには單なる空論となってしまうのである。

歐陽脩が、「窮而後工」として高く評價した孟郊、賈島に對する他の人々の評價は、必ずしも彼の賞讃を全面的に支持する方向には向かわない。そうした動きは、早くも彼の門人の蘇軾によって示された。蘇軾は、「柳子玉を祭る文(祭柳子玉文)」の中で、「郊寒島瘦」すなわち、孟郊の詩は寒々として殺風景であり、賈島の詩は瘦衰して弱々しいと評した。⁽¹³⁾この評語は、歐陽脩が孟郊、賈島の作品を賞揚した以上に、人々の共感と呼んだものと見え、郊・島兩者に對する評語のいわば決定版として繼承されていった。⁽¹⁴⁾

このように、「窮而後工」という詩の評價の基準もまた、「理」「情」の場合と同じく人々の同意(共感)によって左

右されるものであった。従って、これもまた安定した評價基準とはなり難いものであったと言えよう。

(四)

以上、歐陽脩の示した詩の評價基準三點について大まかな整理を試みた。それらは、歐陽脩が獨自に唱えたものではなく、傳統に立脚し、或は従來の使用範圍を擴大し(理)、或はより普遍性を得るべく定義付けを行うなどして(情、窮)、いわば歐陽脩のオリジナリティーを加味したものであった。そしてそれらに共通するのは、「同意(共感)」を常に前提とすることであった。「同意(共感)」を最大の據り所とする、このような作品評價の方法が、どのように繼承されて行くか——それは、この評價基準の提唱者の影響力が大きいだけに、問題となつて來よう。

問題の芽は、早くも歐陽脩自身に萌している。

*

*

歐陽脩は「理」「情」を兼ね備えた詩を作り、「窮而後工」となつたと考える一人の人物を設定して、繰返し賞讃した。

——その人物とは外でもない。歐陽脩の著作に文字通り頻出する、梅堯臣その人である。

歐陽脩の詩の評價基準をめぐって(増子)

まず、「理通」の例を見ることとしたい。歐陽脩が高く評價した作品は、梅堯臣が范仲淹の開いた宴席上作つたという「河豚魚詩(范饒州が坐中、客 河豚魚を食ふを語る〔范饒州坐中客語食河豚魚〕)」の次の一節である。

春洲生芽荻、春岸飛楊花、河豚當是時、貴不數魚鰕〔宛陵先生集〕卷五)

歐陽脩は、これに對して次のように述べる。

○河豚常出於春暮、羣游水上、風絮而肥、南人多與荻芽爲羹、云最美。(中略) 聖俞平生苦於吟詠、以閑遠古淡爲意、故其構思極難。此詩於罇俎之間、筆力雄贍、頃刻而成、遂爲絕唱〔詩話〕

ここでは「理通」について直接述べることはしていない。しかし、梅堯臣の詩にうたわれている内容を考證によつて「實事」であると説き、しかる後に評を加えていることから、この作品が「理通」であるという認識が歐陽脩にあったと見て良からう。

「情」についてはどうであろうか。歐陽脩が梅堯臣の詩を「盤車圖」において、「梅詩 物を詠するに情を隠すこと無し」と評したことは、本稿(二)において觸れたが、「梅聖俞が稿後に書す(書梅聖俞稿後)」では、梅堯臣を、詩の正統を繼承するものであるとし、

○今聖俞亦得之。然其體長於人情(『居士外集』卷三)

と述べている。「其の體、人情に本づくに長ず」——これは梅堯臣の詩への絶讃と稱して良い。

そして「窮而後工」であるが、これこそまさに梅堯臣のために用意された評語の觀すらある。

○蓋愈窮則愈工、然則非詩之能窮人、殆窮者而後工也(『梅聖俞詩集序』『居士集』卷二)

○世謂詩人少達而多窮。蓋非詩能窮人、殆窮者而後工也。

聖俞以爲知言(『梅聖俞集誌銘』『居士集』卷三)

高級官僚であった叔父、梅詢の傳手によって下級官吏の職をえ、科擧及第者たちが次々に出世コースを歩む中、それか

らも外れ、二十年餘の地方官生活。その間に最愛の妻や次男を相次いで亡くし、亡骸を納める棺すら購えぬ窮乏ぶり——梅堯臣のこうした窮狀が、詩人としての才能を磨いたのだ、と歐陽脩は力説する。

* * *

このように、歐陽脩は自らの主張する詩の評價基準の全てに適合した詩人として、梅堯臣を讚美した。兩者がいかに互いを尊敬し合い、影響し合い、深い友情で結ばれていたかは、相互の集を讀めば立所に見て取ることができよう。これらの發言は、そうした前提があつてのものであることは間違いない。しかし、それにしても、この手放しとも言うべき賞讃は、はたしてどれほどの人々に共感され、どれほどの普遍性と通時代的評價を受けたのであろうか。

(五)

梅堯臣の詩作における才能は、獨り歐陽脩のみならず同時代人から既に高い評價を受けていたことは、『宋史』の梅堯臣の傳に、

○錢惟演留守西京、特嗟賞之、爲忘年交、引與酬倡、一府

盡傾（卷四四三）

とあることから知られ、またその詩が西南の異民族の弓袋にさえ書かれていたとのエピソードすらあり（『詩話』）、その流行ぶりがうかがえる。そうした状況下で歐陽脩が、梅堯臣の作品を賞揚し、その評價をいやがうえにも高からしめたのであろう。その評語が多くの人々に共感され、強い支持を受けたであろうことは想像に難くない。今日傳存する、歐陽脩の時代に近い時期に成立した詩話の幾つかには、彼の言説をそのまま載せ、それを支持する旨記されていることからそれがわかる。⁽¹⁵⁾

けれども、歐陽脩の梅堯臣に對する評價は、必ずしも多くの人々の共感を持続的には得ることが出来なかつたようである。

歐陽脩が「理通」であることを考證を通じて證明しようとした「河豚魚詩」の詩句については、さまざまな論議を巻き起こした擧句、宋・葉夢得から「理通」の唯一の據り所であった考證自體が、江西地方にのみ通用するものであり、全く普遍性のないものである、と指彈された。⁽¹⁶⁾「秩序感」が共有されなかつたからである。

歐陽脩の詩の評價基準をめぐって（増子）

「其の體、人情に本づくに長ず」——これは梅堯臣本人の意識から、そもそもずれたものであった。梅堯臣は「情」の重要性を十分認識しながらも、それを第一とすべきではないと考へ、その詩「中道の小しく疾らるるに寄せらるるに答ふ（答中道小疾見寄）」において、

詩本道情性 詩は本 情性を道ふも

不須大厥聲 厥の聲を大にするを須ひず

方聞理平淡 方に理の平淡なるを聞くべし

昏曉在淵明 昏曉 淵明に在り

（『宛陵先生集』卷二四）

とうたい、詩は平淡たるべしと主張した。歐陽脩には、「梅詩、物を詠じて 情を隠すことなし」（「盤車圖」）とうたわれた梅堯臣であるが、本人の作詩への思いと、本人への評價との間に見られる落差は、質的にも大きいと言わねばならぬ。

後世の評価もまた、歐陽脩の主張よりも、梅堯臣本人の意圖をより強く繼承する。

○梅堯臣亦善詩、雖乏高致、而平淡有工(宋・魏泰『臨漢隱居詩話』)

○梅聖俞學唐人平淡處(宋・嚴羽『滄浪詩話』)

○聖俞詩工於平淡、自成一家(『梅都官』、『荅溪漁隱叢話』後集卷二四)

この外、今日迄傳わる『詩話』の類を概観しても、歐陽脩が梅堯臣の作品を「其の體、人情に本づくに長ず」と評するの(17)に賛同した口吻は見出し難い。

そして何よりも、歐陽脩がこれほどまでに力を傾注して「窮而後工」と賞揚した梅堯臣の作品に對する人々の評價そのものが、彼の期待とは裏腹にその才能は認めながらも、次第に地味なものへと行って行つたのである。

宋・張戒は『歲寒堂詩話』において、人の才能にはそれぞれ限界があり、同じ一つの物を詠じても、その巧みさには深淺があると論じた上で、梅堯臣の作品を「何ぞ其の語の凡なるや(何其語凡也)」と評した。また、朱熹も『朱子語類』において次のように評する。

○或曰、聖俞長於詩。曰、詩亦不得謂之好。或曰、其詩亦

平淡。曰、他不是平淡、乃是枯槁(卷一三九「論文」上)

「凡」「枯槁」という評は、或は酷評に過ぎようが、歐陽脩の梅詩への絶讚に共感出来ぬ人々の發言が早くも南宋からあつた事を示して興味深い。

さらに明代になると、詩人として、また多くの詩人を育成した事で有名な李東陽が、梅堯臣が自らと歐陽脩の關係を、韓愈と孟郊とのそれになぞらえた詩を評して次のように述べた。

○或謂梅詩到人不愛處、彼孟(郊)之詩、曷嘗使人不愛處者哉(『麓堂詩話』)

この評は、唐詩を高く評價したとされる李東陽の發言であることを割引いて見ても、「梅詩、人の愛さざる處に到る」という指摘には、當時の世評の實態が示されているものと思われる。

このように、歐陽脩が最も優れた詩人として賞揚に努めた梅堯臣の作品に對する評價は、日と共に共感を失い、人々からさほどの注目を受けぬようになってしまったのであつた。

結語

以上のように、歐陽脩が詩の評價基準として用いた「理」「情」「窮而後工」のことごとくが、實は人々の共通理解（共感）の存在を前提とするものであり、必ずしも確かな「足場」に立脚したものではない、ということ指摘した。さらに彼が、そうした性格を持つこれらの評價基準を、いわば總動員して梅堯臣の作品を賞揚し、一時的には強い共感を得たものの、やがては時の流れの中で、その共感が失われて行ったことを見た。

歐陽脩がこれほどまでに梅堯臣の作品を高く評價した理由については、既に多くの指摘がある。同じ「南人」と言われる地或の出身者であること、出身基盤が類似していること、その窮乏に對する同情、さらには歐陽脩の主張する詩論のプロバガンダと爲そうとした等々。しかし、何よりも、當時の詩壇の主流を占めていた西崑體の過度な修辭的技巧や、ともすれば空疎に陥りがちな内容など、そうした傾向に少なからぬ不満を覚えていた人々に梅堯臣の詩風が強い共感と呼んだという事が、最大の理由であろう。そうした人々の中心にあって、その新たな詩風の浸透をはかるべく、力を傾注したの

歐陽脩の詩の評價基準をめぐって（増子）

が、歐陽脩の梅詩への絶讃だったのであろう。「理」「情」そして「窮而後工」などの評語も、まず第一にそれらの西崑體に不満を抱いているであろう人々に「共感」されることを目指したものと云える。そして、そうした共感をより強く感じるように、更にはより多くの人々に共感を得ようとしたのが「考證」だったのである。

けれども、その最大の據り所が「共感」という主觀的尺度であったがために、眼前の倒すべき相手即ち西崑體が衰退し、時が経過すると共に、その共感は弱まらざるを得ない。いわば臨戰體制下とも言うべき情況下の結束が緩み、世代交代と共にその共感が得られなくなつて行つたのである。

そして、その後には、「共感」を前提とする詩評價の方法のみが残されたと判断されよう。

歐陽脩自身は、「朋黨論」を著したことからも明らかのように、黨派に對しては必ずしも肯定的な立場はとっていないかたどとされる。そして、詩評價の基準の一つとなつた「理」という語もまた、本來は黨派性の薄い語であつたと評される⁽¹⁹⁾。しかし、文學論にさえも政争の、色濃い影が落とされる次の世代にあっては、「共感」を前提とする詩評價の方法は、

むしろ絶好の武器たり得なかつたらうか。自らの黨派の文學論に強い「共感」を持つ人々の詩論は、それが政争がからむだけに非寛容、非妥協を是とし、論争は不毛の水かけ論の泥沼となる。論争が、詩の評價そのものを離れて自己目的化して行く時——方法論の生みの親である歐陽脩の豫期したものととは全く異なつた情況が展開される。その有様は、いづれ稿を改めて、見て行かねばなるまい。

〔注〕

- (1) 歐陽脩の『詩話』は、『六一詩話』『六一居士詩話』『歐公詩話』等の別稱を持ち、後世『——詩話』の名のもとに陸續と作り繼がれた、狹義の詩話の嚆矢として知られている。本稿では『歐陽文忠公集』收載のものに従い、單に『詩話』と稱する。
- (2) 劉子健「歐陽脩の治學與從政」(新文豐出版公司、一九六四年初版)、坂田新「歐陽脩『詩本義』について」(『詩經研究』第一號、詩經學會、一九七四年)及び本稿注(4)、(6)に示したものである。
- (3) 「評語多指涉抽象的風格、很少具體的剖析和精微的賞鑑、故一般價值不甚高」(張健「歐陽脩之詩文及文學評論」、人文庫、臺灣商務印書館、一九七三年)。
- (4) 「歐陽脩の文學論における『理』」(『中國詩文論叢』第二

集、中國詩文研究會、一九八三年)。

- (5) 溝口雄三「中國の『理』」(『文學』第五卷第五號、岩波書店、一九八七年五月)、土田健次郎「歐陽脩試論」(『中國社會と文化』第三號、一九八八年六月)。特に土田氏の論文からは多くのことを學んだ。記して謝意を表したい。
- (6) 溝口雄三「中國の『理』」参照。
- (7) 南宋・胡仔「苕溪漁隱叢話」前集卷一五。
- (8) 鈴木修次「『情』の認識とその展開」其一(『東書・國語』二五四號、東京書籍、一九八五年九月)参照。
- (9) 「送陳秀才彤序」(『朱文公文校昌黎先生集』卷二〇)。
- (10) 同右、卷一〇。
- (11) 「人情」は『理』の具體的説明という面を濃厚に持つものである。(中略)「人情」は『理』であり『自然』なのである。(土田健次郎「歐陽脩試論」一〇五頁)。
- (12) 「東坡集」卷三五。
- (13) 「孟東野詩苦思深遠、可愛不可學」(宋・許顛『彥周詩話』)、「元輕白俗、郊寒島瘦、皆病也」(宋・張表臣『珊瑚鉤詩話』)。
- (14) 中でも壓卷は、『歐陽文忠公集』に付録として收められている書簡であろう。十卷に分けられた書簡集のうち、第六巻全てが梅堯臣宛の書簡で占められ、その數四六首に及ぶ。
- (15) 例えば、宋・劉攽『中山詩話』などでは、その名こそ擧げてはいないが、梅堯臣の作品を歐陽脩が『詩話』の中で賞讃

したのと全く同じ語句を用いて賞讃している。

(16) 『石林詩話』上。その論議は『茗溪漁隱叢話』前集卷三「梅聖俞」に詳しい。

(17) 宋・魏慶之『詩人玉屑』、胡仔『茗溪漁隱叢話』、清・何文煥『歷代詩話』、民國・丁福保『同續編』等。

(18) 「永叔の詩八首并びに子漸を祭る文一首を寄す、因りて八詩の意の警意を采り、以て答と爲す（永叔寄詩八首并祭子漸文一首、因采八詩之意警意以爲答）」（『宛陵先生集』卷二四）。

(19) 注(5)土田論文一〇〇頁参照。